

初期研修医の医療安全教育のあり方

— 1年の経験から変容した医療安全意識と学習プロセスから考える —

A proposal of education of medical safety management for junior residents in a general hospital

城尾裕子¹⁾ Hiroko Joo、城尾邦隆²⁾ Kunitaka Joo、山下信行²⁾ Nobuyuki Yamashita、松尾太加志³⁾ Takashi Matsuo

1) 北九州市立大学大学院人間文化研究科、2) 九州厚生年金病院医療安全管理室、3) 北九州市立大学文学部

【目的】 新臨床研修制度開始から3年目を迎え、研修医の動向が注目されている。本報告では、単独型臨床研修病院の2年次に焦点を当て、1年間を振り返る中から、変化した内容とそれに至る学習プロセスを導き、医療安全教育のあり方を考える。

【方法】 K 単独型臨床研修病院で、まず、後期研修医2名、初期研修医2名と面接予備調査を行い、質問すべき内容を整理した。調査は、平成19年4～7月、同病院の研修医2年次生13名中、同意の得られた12名を対象に、自由面接法で実施した。質問した内容は、①1年で変化した内容、②教育体制について、③指導医・看護師・レジデント・同僚との関わり方、④患者の会話内容と患者の情報収集法、⑤自ら関わったインシデント・アクシデント、⑤技術習得である。

【結果】 面接での回答内容を整理すると、技術習得を除き、以下のように意識変容に至った学習プロセスを導き出した。①最も変化した内容は業務に優先順位をつけることで、指導を仰ぐだけの態勢から、指導者の回答と自分の考えとの相違点を見出し、次に自分の考えを評価して軌道修正をするサポートを相手に望んでいった。②教育体制では、当初の3ヶ月間に細分化した科で複数の専門医が関わり混乱するが、次の科で1対1の指導を受け混乱が緩和している。③指導医、レジデント、同僚、看護師、患者との関わりでは、指導医だけから学ぶのではなく、他の医療職者や患者との人間関係の持ち方や会話の中から経験し変化に至っている。④医療行為の実施者である研修医が自分自身も事故の当事者になると捉えて医療安全への意識が変容している。さらに自らを守るために、勉強会や医療安全研修会を企画運営する主体的行動へ変容した。

【結論】 研修医が1年間に得られたものの中で意識変容した学習プロセスについて4つの側面を示すことができた。大学で医療安全教育を受けた研修医は、医療現場での大きな乖離に戸惑い、しかもその状況は多忙な業務を日常的に行っている指導医には伝わりにくい。研修病院での医療安全教育には、研修医の気づきを受け止め、研修医一人ひとりの評価・修正を指導する土壌が必要である。今後も、研修医の意識変容を追い、医療安全教育のあり方を検証していく。